

トレセン学園広報部撮影課 別名『草w』

tfride

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

トレセン学園…。

日本に存在する、国内最大のウマ娘の為の勉学とスポーツの園。

今日もまた夢を掴む為に、様々な思を胸にターフを走る足音が響き渡る。

時期は春になり、桜も咲き乱れ寧ろ散り際を慈しむ様になってくるだろうが、しかしこの場所は新たなウマ娘がこの学園に入学し、新たな夢への第一歩を歩み始める季節とも言える。

そして、新たなウマ娘がターフをかけると言うことは、新たな衣装やPVが作成されると言う事でもある。

そう。

ウマ娘の数だけ宣伝用の特殊な撮影や加工を施した映像や、思いを込めた衣裳。

場合によってはぬいぐるみやブロマイドカードの開発、作成は、この世界にレースという概念が固く根付いている事からまさに急務と言えよう。

そして考えたことは無いだろうか。

「これ誰が作ってんだ？」と。

サイゲって言った奴は帰れ。

その通りだから。

これは、その宣伝用の撮影や加工の全てをたったの四人で行っている、バ鹿のお話である。

目次

スペシャルウィーク 『北海道に行ってきます』	1
サイレンスズカ 『走ってきて良いですか?』	12

スペシャルウィーク 『北海道に行つてきます』

トレセン学園…。

日本に存在する、国内最大のウマ娘の為の勉学とスポーツの園。
今日もまた夢を掴む為に、様々な思を胸にターフを走る足音が響き渡る。

時期は春になり、桜も咲き乱れ寧ろ散り際を慈しむ様になってくるだろうが、しかしこの場所は新たなウマ娘がこの学園に入学し、新たな夢への第一歩を歩み始める季節とも言える。

そして、新たなウマ娘がターフをかけると言うことは、新たな衣装やPVが作成されると言う事でもある。
そう。

ウマ娘の数だけ宣伝用の特殊な撮影や加工を施した映像や、思いを込めた衣裳。

場合によつてはぬいぐるみやブロマイドカードの開発、作成は、この世界にレースという概念が固く根付いている事からまさに急務と言えよう。

そして考えたことは無いだろうか。

「これ誰が作ってんだ？」

と。

サイゲって言った奴は帰れ。

その通りだから。

これは、その宣伝用の撮影や加工の全てをたったの四人で行っている、バ鹿のお話である。

【誇れる自分になるために！ 私…勝ちます!!】

スペシャルドリーマー スペシャルウィーク

北海道に行ってきます

トレセン学園。

ウマ娘にとって全てが揃っている。そういう場所の。

トレーナー室の。

更に隅にある倉庫。

体育館…と言うよりも、沿岸や港の倉庫といった程の大きさの緑の屋根のその建物。入り口前には堂々と『W』の文字が描かれている。

正面の両開きの大きな引扉を僅かに開けて、緑色の帽子が外から顔を覗かせた。

「おはようございます…」

そう恐る恐る口に出した全身緑で固められたレディーススーツに身を固めた駿川たづなが倉庫に入っていく。

中に入れば電気は点けっぱなし、それに照らされるグリーンバック用の緑天幕、高そうなカメラが5台ほど三脚に固定されたまま放置され、天井からワイヤーが何本も垂れ下がり、更には何に使ったのかわからない大量の様々なペンキや、へし折れたブーメラン。

空気の抜けたサッカーボールも転がっていた。

一体なにがあったのかと思うかも知れないが、その光景をみた当の本人は何事も無かったかのように奥に進み、突き当たりにある管理人員のような部屋に入っていく。

「皆さん、朝ですよー！」

もはや慣れているのであろうか。

そう声をかけるたづなの目の前には、部屋の二辺を長テーブルで固め、見るからに高スペックなパソコンが陳列される中、中央に長テーブルを二つ並べてスペースを確保した場所に並べられる勝負服に身

を包んだウマ娘の写真や、何かしらの会議資料が散乱する中、四人の男が座ったまま、もしくはテーブルに突っ伏したまま…。

事切れたように…言い方を悪く言えば死んだように眠っていた。

そのうちの一人がパソコンのキーボードを枕替わりにしているせいで、スピーカーからは永遠と

『ティロティロティロティロティロティロティロティロティロティロティロティロティロ』

とエラー音が鳴り響いている。

すぐ様目の前の椅子に座ったまま天井を仰ぎ寝息を立てている男を揺すった。

「忍さん、朝ですよ。起きて下さい」

その言葉にうめき声を上げながら目を開ける男。

中肉中背で黒縁の眼鏡をかけた大凡30歳程度の笹原忍は、そのザックバランに切られた黒髪を掻きながら一言。

「出たな緑の悪魔」

「誰が悪魔ですか」

大きく伸びをして隣で座ったままテーブルに突っ伏している男。

癖っ毛を通り越し天然パーマのゴワゴワ頭にその体格は190センチを超えるかなりの大男を揺する忍。

「起きろ陸人、始発が始まったぞ」

「う、…なら良いじゃねえか…寝かせろ」

そう言いながらその体を丸め講義する雨川陸人だが、忍のモーニングコールは終わらない。

「それも言つてられん。目の前に緑のアイツがやってきた」

「うう…悪魔あ…」

「普段あなた達は私の事なんだと思ってるんですか！」

「ウマ娘に足で追いつく人娘」

「化け物」

そのやり取りにもう一人、椅子から転げ落ち地面で横になつていた、これまた陸人に負けない天然パーマを提げてた諏訪木郎が目を感じました。

「おはよう」

「おはよう木郎、良い夢見れたか」

「全身から肉がボロボロもげて行く夢を見た」

「悪夢やん」

とそこで、たづなが周りをキョロキョロと視線を動かし三人に尋ねる。

「ところで兎人さんが見えませんが」

そう言つて三人も周りを見渡すも、もう一人の影は無い。

しかしながら椅子は四つ。もう一人いるはずだ。

そこで三人は顔を見合わせ、一斉に中央のテーブルの下を覗く。

そこには青い寝袋に包まって幸せそうに寝ている男。

かなり小柄の、それこそ一見子供と見間違う程に小柄の男が一人：それを脳が認識すると、間髪入れずに三人がその寝袋に向かって手加減なしの蹴りを入れていく。

「ガフっ!?!いで!?!待って!!待って!!ああああああおはようございませううううううう!?!」

強制的に叩き起こされる赤嶺兎人。

寝袋に入ったままではろくな抵抗もできずに蹴られて行く中、一頻り満足すると忍が一言。

「起きろ芋虫」

「蹴る前に言つて欲しかった…」

「作業が完了する前に寝袋でとつと寝たやつ誰だったかあ?」

「もつと蹴つて」

「それはそれでキモいから止めて」

「ごほん!」

四人の無駄話を咳払い一つで中断させ、背筋を伸ばしたづなが話し始めた。

「皆さん、おはよう御座います」

『ういっす』

四人全員がなんの示し合わせもなく同じ返答に内心可笑しいたづなであるが、ここは一旦落ち着いて。

「先日は急遽撮影予定の入ったウマ娘さんの撮影、お疲れ様でした」
「そう思うならこのまま帰って良いですか？」

すかさず手をあげて帰宅の懇願を始める木郎に、一度手で制してそのまま話を続けるたづな。

「こちらもそうして頂きたいのですが、その前に一人だけ新入生の方の撮影会議だけお願いして欲しいんですが…」

そのたづなの提案に、三人＋芋虫が明から様に嫌そうな顔をして明後日の方向を向いた。

「い、いや、頑張つて頂いているのは分かっているのですが…」

「クソブラック職場め」

「さすがはウマ娘の為の学園」

「ウマ娘以外に手心が加えられているとは言っていない」

「誰かここ（寝袋）から出して」

あーだこーだブツブツサ文句を言いながらも、しかしながらそそくさと会議の準備を始める四人。

奥に放つたらかしのパイプ椅子を取り出し、散乱している資料を片付けてあつという間に準備万端。

つと、そこで陸人が待ちぼうけしているたづなに一言。

「んで、今回の子はなんて名前？」



「はい、スペシャルウィークちゃんこんにちは」

「よ、よろしくお願います！」

忍の初めの挨拶に一度立ち上がり深々と頭を下げるスペシャルウィーク。

彼女は今回、自信が出走するレース等で使用される紹介用のPV撮影のためと、トレーナー室の更に奥にあるこの緑の倉庫にやってきた。

最初はアイドルの撮影の様な印象を受けたスペシャルウィーク

だったが、事前に確認した他のウマ娘のPVを見た時はかなりの衝撃を受けた。

全員が各々の個性を象徴するような…空を飛んだり流星になったり国道を破茶滅茶な速度で疾走したりなど、まさしくそれは個性の象徴。固有演出の名に恥じないものだった。

それをこのトレセン学園の倉庫で…しかもたったの四人で行っていると思うと。

「この人達はきつと凄い人なんだ！」

この際胸を借りるつもりでお願いし、自分だけの最高のPVを作ろうと心に決めたスペシャルウィーク。

が、等の本人達は。

「いやそんな畏まらなくて良いから」

「早く帰って寝たいから」 ささつと終わらそう」

忍と木郎が前に出てスペシャルウィークの話聞き、陸人がパソコンに大まかな内容を纏め、兎人が絵コンテを担当すると言った、四人からすればいつものスタンスで話は始まった。

「んでスペシャルウィークちゃんね…名前長いなスペシャルちゃん？ウィークちゃん？」

「あ、大丈夫ですよ。皆さん呼びやすいように呼んで下さいます。一番多いのはスペちゃんとか——」

「んじやスペシャルウィークとかでもいいの？」

「いやその…」

「忍、困ってんじやん。間をとってスペシで」

「え」

「それだ、それでいい？」

「す、スペちゃんをお願いします…」

今更ながらにこの四人に任せて良いのか不安になってきたスペシャルウィーク。

しかし忍の欠伸の後にようやく本題に入る。

「で、PVの話になるんだけど、スペちゃんはどんな感じが良いとか要望はある?」

「要望ですか…」

「そういえば自分がどんな風にしたいか、などは考えて来なかったと今更ながらに考え始めるスペシャルウィーク。」

「やはりここは自分だけの特別なものにしたいたい為、むむむ…とうねり声を上げながら考える彼女に、木郎が助け舟を出す。」

「そんなに深く考え込まなくても、例えば『こんなものを登場させた』とか『昔見たあの作品みたいにしてみたい』とか」

「そのセリフに暫く考え込み、そういえばと話を始めるスペシャルウィーク。」

「そういえば、前に家で見たんですけど。テレビで魔法少女のアニメがやってたんです」

「え、魔法少女?」

「いきなりの話の展開に一瞬ついてこれない忍だが、スペシャルウィークは構わず続ける。」

「その時に魔法少女に変身するシーンで、普段着から魔法少女の服に一瞬で変身するんです!」

「おジャ魔女ど●みみたいに?」

「そうです!」

「スペちゃん何歳?」

「そんな感じに、私も変身してみたいです!」

「んでスゲーなスゴイですって呪文を唱えるのか」

「それランプ」

「スペシャルウィークの要望に兎人はせっせと絵コンテを描き始め、それを確認した忍と木郎が話を続ける。」

「んじや魔法少女以外に入りたい要素はなんかある?」

「強いて言うなら…私は北海道に住んでいたのですが…」

「ほうほう」

「もつと私が小さい頃に夜の空に流れ星がいっぱい落ちてきた事があるんです」

今時の女の子らしく、ある程度ロマンチックなものに惹かれるかの如くウキウキで話始めるスペシャルウィークに、それならばどCGで流星群を再現するかと考えていた四人。

しかし、彼女の口から出てきた言葉に、啞然とすることになる。

「なので、みんなで北海道に行きましょう!!」

『はい?』



時間が経過し、既に辺りは真つ暗。

しかし月明かりに照らされて以外にも視界には困らない。

そんな中で少し大きめのテントの入り口に四人ならんで座っている男たち。

ゆったりと時間が流れる中、口を開いたのは陸人だった。

「なあ、何で俺達こんなところで四人には狭いテントの中星空を見上げてるんだ?」

その疑問に間を置いて木郎が答える。

「それはスペシャルウィークちゃんがPV撮影の為にどうしても北海道の流星群を使いたって聞かなかったからだよ」

「なんやかんや翌日にトレーナーさんも来て頭下げられちゃったからね。断れないよね」

「何冷静にこの状況を飲み込んでんだ兎人。後その白い恋人一個くれ」

「ところで今の時期って流星群見れんのか?」

「それも飛行機の中で話したけど今の所そんな予報は無い」

「なのにこんなトコまでテント貼って待ってんの?馬鹿じゃないの?ってか当の本人はどうした」

「スペシャルウィークちゃんは実家に帰ってるよ」

「何？あの子ってサイコなの？」

「女の子とこんな春先寒空の下で成人した男四人とテント泊する訳にはいかんだろ」

「女の子とテント泊するのはダメで男四人を外に放置はOKってか、人の心とか無いんか」

「それよりも今回の移動費だけで相当掛かっているんだけど経費で落ちるのかコレ」

「最悪生徒会じゃなくて理事長に領収書叩きつけるから平気」

『驚愕』って言いながら倒れそう」

「てか何で生徒会が会計してんだ？普通総務の仕事だろ」

「去年の年末にルドルフが魂抜けた顔して年末調整の書類に頭抱える所目撃したからさ」

「手伝ってやれよ人でなし」

「やだよ」

そんな無駄話を初めて既に2時間。

関東を離れこんな周りに何も無い北海道の僻地までやってきたお陰で、確かに夜空はとても綺麗である。

が、問題の流星群…と言うよりも、むしろ流れ星一つ見えやしない状況で少しずつ頭がおかしくなっていくのを感じてはいる。感じてはいるのだが現状目的が達成されないと来た意味がない上、ここまで来たんだからやってやるよ畜生という毛が生えた程度の意地が芽生えていく。

しかしながら時間は既に午後9時近くなってきており、男たちも限界が近くなってきた。

「仕方ない…最終手段だな」



「わあ！スゴイです！」

勝負服に着替え撮影が終わったスペシャルウィークは、倉庫の中で仮で完成したPVを見ながらぴよんぴよんはしゃいで喜びを表現している。

夜空を流れる三つの流星に、光に包まれ一瞬で勝負服に変身するスペシャルウィーク本人。

そのクオリティにスペシャルウィークのトレーナーも満足したのか、彼女と共に頭を下げお礼を四人に向けている。

それに対して満更でもないのか、ドヤ顔で胸を張る四人。

あの後何とか撮影に成功し、しかし当の本人は実家で爆睡していたため別撮りで合成し何とか事なきを得た。

「それにしても皆さん本当に凄いですよね」

そのスペシャルウィークの言葉に、何のこつちやと顔を見合わせる四人。

今更改めて言うほどの事かと疑問に思っていると、スペシャルウィークが続け様に。

「先輩方からお聞きしましたが、皆さんって撮影だけじゃなくて、学園の修繕とか勝負服の補修とか。結構何でもやってくれてるって皆さん言っていました」

その言葉に若干苦笑いを浮かべながら忍が代表して答える。

「いやまあ、本当は撮影の為に雇われてるんだけど。あぶれた仕事がかつちに舞い込んでくるというか」

「えっと、それってもしかして良いように使われてるって…」

「やめろ」

「それとこの倉庫の色や皆さん基本的にグリーンバック用に緑色の服を着てるから、みんなから『草』って呼ばれているのも本当ですか?」
「それもやめろ」



「ありがとうございますー!」

その言葉と共に倉庫を後にするスペシャルウィークとトレーナー。完成品は完成次第DVDに焼いて渡すことを伝えると。

「実家のお母さんに早く渡したいです！」

と何の屈託のない眩しい笑顔に、太陽に焼かれる吸血鬼の如くダメージを負った四人であった。

残された四人はいそいそと未完成のPVの作業に取り掛かろうとしたところで、倉庫に備え付けの電話が鳴り始めた。

すぐさま手に取ったのは忍。

「ハイもしもし…ああベガちゃん？この間の流星群ありがとうね」

サイレンススズカ 『走ってきて良いですか?』

先頭のもつと先:

誰も見たことがない景色へ!

「サイレントイノセンス」サイレンススズカ

「走ってきて良いですか?」



昼。

あいも変わらずトレセン学園の敷地内にも関わらず、一番端っこに立て付けられているせいでウマ娘の一人もやってこない閑散とした場所にある緑の倉庫。

そこから水が撒かれる音とブラシで擦り上げる音が響き渡る。

いつもは人一人が通れる程度に開けられている大扉も今は解放され、そこから虹色に変色した水が流れ出し、直ぐ目の前の金網で塞がれた排水路に流れていく。

今現在、倉庫内は相変わらず全員緑色の作業着の木郎、陸人、兎人の三人で、前回そのまま放置されていた大量のペンキの掃除を行っていた。

しかし擦っても擦っても中々落ちないペンキ汚れに嫌気がさした兎人が、口を開いた。

「俺もうこんな仕事ヤダ!」

「は?」

思わず素の返しをしてしまう陸人。木郎はブラシの手を止めることなく「またか」と相変わらず無表情でつぶやいた。

まあ良い気分転換になるだろうと未だにブラシを振り回しながら駄々をこねる兎人に尋ねる陸人。

「逆に聞くけどお前はどんな仕事したいんだよ」

その言葉を待ってましたと言わんばかりにブラシを投げ捨てて、ど

ここから取り出したのかサングラスをかけると。

「よくぞ聞いてくれた!!」

「ブラシ拾ってこい」

するといきなりスイッチが切り替わったかのようにトボトボ歩き出し、ブラシを拾って元の位置に戻る兎人。

そして何事も無かったの如く。

「よくぞ聞いてくれた!!」

「…おう」

もうこの際些細なことは無視しようと思いに決めた陸人。

対して兎人はデツキブラシをまるでスタンドマイクを扱うの如く振り回し。

「俺はこう!…クリエイティブで人の役に立つような仕事がしたい!」

「ここの掃除終わったら仕事紹介してやるから続けろ」

その陸人の言葉に顔を満面の笑みにして。

「分かった!」

と掃除を再開する兎人。

その光景に一度手を止めて陸人に近づく木郎。

「陸人ってそんなに顔広かったんだね。どこ紹介するの?」

「(コン)」

クリエイティブ↓撮影編集、設備維持、何よりこの世で注目を集めるウマ娘関連の仕事

人の役に立つ↓結果として役に立たない仕事はない

「嘘は言っていないね」

「嘘は言っていないだろ?」

「どうしたの?」

「良いから続けろ」

「分かった」

約一名が詐欺に近い被害に遭っている中、三人向かって外から忍が顔を出しながら声をかけた。

「ヤアヤア皆の衆頑張っておるかね？」

その手にはいくつかの茶封筒が握られており、恐らくつぎの撮影の資料などが入ってるのであろう。

「おかえり忍。理事長はなんて言ってた？」

「この間のスぺちゃんの撮影費の領収書見せたら『高額っ！』って言いながら扇子に驚愕って出た」

エアグルーブのやる気が下がった。

「んでつき返されと」

「つき返されたけど、『新品で買った耕運機でテンション上がってエンジンぶっ壊したのを直したの誰でしたっけ？』って言ったら快く清算してくれた」

「泣いてなかった？」

「海外行った時も泣いてたからいつも通りだろ」

「忍！俺この仕事やめる！」

「おう、元気でやれよ」

この男、血も涙もない。

意気揚々と掃除を続ける兎人を放置して、忍がそういえば…と茶封筒から何枚かの紙を取り出した。

「さあ皆さん、新しいお仕事ですよ」



「サイレンススズカです。よろしくお願いします、草の皆さん」

「よろしくねスズカちゃん、その呼び方誰から教わった？」

草の倉庫の編集室で椅子に腰掛けながら五人は話を開始した。

どこか掴み所のないテンション…というよりかなりおっとりとした口調で話すサイレンススズカに対して、いきなり未だみえない第三者を聞き出そうとする忍を宥めながら木郎が続ける。

「スズカちゃんは今回PV撮影ということどこに来たわけだけど、自分でこう言ったモノにしたいとかのイメージは出来ているかな？」

その問いかけに、当の本人は少し困り顔で答えた。

「イメージ…ですか、そうですね…」

少し間を置きながら視線を落とす、テーブルに置かれているボールペンを見つけると片手で取り上げる。

「PVっていうのは、皆さんに私自身を紹介するためのものだと思うんですけど、私は皆さんに自分の何を紹介したら良いのか分からなくて」

そう言いながら片手に持ったペンをゆっくり…けど少しづつ早く回転させていく。

基本左回りで回転していくペンは、段々と回転数が上がっていき、おおよそ人間の目では追いきれなくなっていく。

「そこまで得意な事もないですし…」

「って言っておきながら超高速でペン回ししてるんだけど揶揄ってる？」

一旦ペンを置かせて話を続行する。

「そうさなあ…例えば私はこれが好きとか」

「好物、だと大福でしょうか」

「ソレは一旦置いてこう」

「それ以外だと月並みですがニンジンとか…」

「食い物から離れろ」

意外にも今までの撮影したウマ娘達にこういったケースの子達は少なかったため、今回に関しては四人も少し手間取っている。

というよりもここまで来ると自己顕示欲の欠如といった別の心配事が増えてきそうな為、なんとか話をレールに載せたい。

「それじゃあ一発芸とかないかな？」

兎人のその一言に、三人は一斉にサイレンススズカに目を向ける。

一発芸の趣味趣向によっては、その傾向でパターンを組めるため各々が期待する中、いきなりの無茶振りにより目が点になるサイレンススズカ。

「一発…えっと、えー」

その振りになんとかして答えなければと、基本真面目気質な彼女の脳は何かないかと部屋中に視線を配り。

そういえばさつき好物の話したなど一瞬で過去の話に頭が持つて

いかれる。

結果。

腕を頭の上に持っていき丸を作り。

「い、いちご大福！」

瞬間、その場が凍りついた。

少しの沈黙の後、サイレンススズカは立ち上がり扉のドアノブに手をかけ。

「少し走ってきます」

『待て待て待て待て!!』

—数分後—

なんとかサイレンススズカを落ち着かせて席に戻ってもらい、突拍子もない提案をした兎人を半殺しにして話は再開した。

「それじゃあスズカちゃんはさっきの言動からして走るのが好きなんだね」

「好きというよりは気づいたら走っていると言いますか」

「どこの戦闘民族だよ」

「先頭民族」

「誰うま」

すると忍が少し考えた素振りを見せてサイレンススズカに向き直る。

「それならスズカちゃんのPVは走っている姿を全面に押し出した感じにするのはどうか？」

その提案に少し考える素振りを見せる。

「そんな感じの映像でも良いんでしょうか？」

「まあそこは俺たちの腕の見せ所ってことで」

その返答に少し顔が綻んで頷いて見せるサイレンススズカ。

やはり本人もこの話のゴールが見えてきて安心してきているのだろう

か。

「んじや問題はどこを走るかだな」

「普通にターフでいいんじやないか？」

「自然の土埃の方が疾走感が出ていいんじやね？」

「公道を全力疾走する訳にはいかないしな」

その意見の飛び合いに背筋を伸ばして手を上げるサイレンススズカ。

「はいどうぞスズカちゃん」

「わ、私…その、できればすごい長い直線を走ってみたいです」

「直線かぁ」

忍がそのお願いにつぶやいた。

ダートで直線が長く、オマケに全力疾走しても法的にも近所にも迷惑にならない場所。



次の日

日の入り直前

「いやー理事長ありがとうね」

「愚問！ウマ娘のためなら現在使用していない畑を貸し出すことなど問題にはならない！」

トレセン学園の…と言うよりも、理事長の秋川やよい個人の畑を前に借りれないかと交渉したところ、二つ返事で許可してくれたのだ。

実際にやよいは、言葉通りにウマ娘のためなら労を一切惜しまないタイプだ。

だからこそ、そこに付け込んで…というと聞こえは悪いが、それも見越した上での交渉だったが大成功。

しかし何か思う所があるのか、少し顔を強ばらせながらやよいは続けた。

「だがしかし!!」

閉じた扇子を畑：もとい、現在綺麗に芝生とダートの本道が敷かれた元畑に向けて。

「驚愕！一夜にして芝生とダート道の施工をするとは聞いていない！」

「言つてない」

「鬼畜か」

「明日には畑に戻すからさ」

「残業確定だな」

「にしても広がったよね、コレ大きさどんくらい？東京ドーム何個分？」

「マク●ス2機分」

「デツカ」

「この狭い日本の何処にそんな広大なスペースあるんじゃ」

「冗談だからな？一機分だからな？」

「どちらにしろデケエよ」

たった一夜にして土を休ませるために放置され雑草が目立っていた畑を、芝生を綺麗に敷きまるで昔からそうであったかのように踏み固められた土色剥き出しの獣道にした四人。

「疑問！第一あの重機はどこから持ってきた！」

視界の端には泥だらけのスコップやショベルカー、ホイールローダー。ダンプトラックやブルドーザーにモーターグレーダーなど、正直言って日常生活では絶対に見ないし覚ええないし使わない特殊車両のオンパレードになっていた。

おそらくこの後に畑に戻すために使うであろうリテラなんかも端に置いてある。

本来ならこれらの重機を持つてくるだけでも1日かかる。

なんで施工も含めて全部1日で終わってるんだらうね。

サイレンススズカに至っては勝負服に着替え終わってそれらの重機を目を点にして眺めている始末だった。

それに対して忍はあつけらかんと答える。

「知り合いに壊れたから貰ったものを修理したりしてたらああなつた」

「譲渡!? それよりも、不明! あの重機は倉庫に入らないだろう!」

その問いに今度は木郎が驚いたように。

「倉庫の裏にいつも置いてあつたよ?」

「学園の土地私物化してんじゃねえよ」

木郎の言う通り、いつもは倉庫の裏手に鎮座しているのだが、当たり前のように倉庫がデカイ上に裏手など回る用もないので本来は気づかないのも無理はない。

「本当に元に戻るんだろうな!! 懇願!! 懇願!!」

「大丈夫だって、土だって元に戻さないといけないんだから」

「懸念! 第一あの土はどこから持ってきたのだ」

「トレセン学園って所々に芝が剥き出しやん?」

「…」



「会長!!」

生徒会室の扉を乱暴に開いて顔面蒼白で現れるエアグルーヴ。

中でコーヒーを啜っていた会長: シンボリドルフは落ち着いた様子で顔を上げる。

「どうしたエアグルーヴ。 鶏犬不寧とは君らしくない」

「お、落ち着いていられますか! 会長もご覧になつたでしょう!」

駆け足で生徒会室の窓に駆け寄り、締め切られたままのカーテンを徐に開くエアグルーヴ。

「見てください! 学園のターフ以外の芝が全て: 全て撤去されているんです!」

外を見れば本来であれば手入れされた芝が所々に散見されていたが、今は完全に土が剥き出しになっている状態。

しかも校舎裏や人目が付かない場所に至っては木も撤去され土が

1メートルほど挟られている状況であった。

「これを見てなぜ会長は落ち着いていられるのですか!？」

と、もしくはこの惨状を見て、あの皇帝と名を知らしめたシンボリルドルフで持つてしても気が触れてしまったのかと…そう思つてしまふ程に状況は深刻であり、双方の温度差に更にエアグルーヴは混乱する。

…が、ふと目をやると生徒会長の席。すぐ目の前の机に一枚の紙切れが。

【ごめんルドルフちゃん。1日芝と土を借りるね!】

【明日には元に戻すから(笑) 笹原忍より】

「(笑) じゃなああああああああああああああ(怒)」

エアグルーヴはキレた。

女帝というよりも魔王と形容した方が無難な表情を浮かべる彼女に対して宥めるように声を掛けるシンボリルドルフ。

「落ち着けエアグルーヴ。彼らはそこまで放蕩三昧な者たちではない。第一去年の秋にアグネスタキオンの実験で半壊した寮(人的被害ゼロ)の復旧ですら彼らは1日で終わらせてしまったじゃないか」

「ソレとコレとは規模が違います!」

あまりの惨状とシンボリルドルフの落ち着き具合。そして草の者達に対する蓄積された鬱憤が今爆発したかの様に間を置かずに口を開くエアグルーヴ。

「そもそも会長はあの人達に甘すぎるんです!何か袖の下でも渡されたんですか!？」

「おいおい、そう言ってくれるな、そんな事——」

エアグルーヴは知らない。

シンボリルドルフの机の中には、忍から渡された

【あの伝説の師匠も絶賛!今年のもも評価された駄洒落100選】

というタイトルの本があることを。

「——ない」

「今の間はなんですか」



「粛清!!」

「だから明日までに元に戻すからさあ」

「ウチのリーダーは鬼畜」



いよいよ撮影が開始されるサイレンススズカのPV撮影。

セリフ等に関してはまだ考えていないが、それは後に別で収録するとの事だったので今は走りに集中することにした。

一度大きく深呼吸すると走るための自身のスイッチが入り、それまでどこか上の空だった表情も一気に引き締まる。

一歩。

地面を蹴り上げぐんぐんと加速していく自分の体。

日も少し顔を出し始め地平線と合わさり道の途切れが遙か彼方にある様に感じる。

足は持つか？息は続くか？

そんなことは構わない。

ただ誰も見た事がない、先頭のその先へ——

——向かおうとするサイレンススズカに全力疾走でカメラ片手に並走する兎人。

「またってなんだ」

「てか凄いな、全力疾走のスズカちゃんにギリギリまで併走してたじゃん」

「この直線2キロあるんだけど」

「ちよつと高松宮記念走ってこいよ」

「1200だったら勝てんじゃね？」

「…コヒュー…コヒュー…と、止まるんじゃねえぞ…」

「分かった、じゃあな」

「元気でな」

「お前は何方かと言えば嫌いだったよ」

「立ち止まって下さいお願いします」



翌日

前日にターフ以外の芝が消えて問題になったが翌日の朝には元に戻っており、学園内では三女神の悪戯…なんて噂も立ってはいたが、エアグルーヴの目の前に事実が文字通り立っていた。

【お返しします】

たったそれだけの文面だけなのにエアグルーヴは頭痛がした。

なんなら噴水周りに何処から仕入れたのか花が植えられており、制服姿のウマ娘がキャツキャツしているのを見ながら、自分も水を撒くためのジョウロを持っていることにため息を吐く。

「一体なんだったんだ」